

III マルコ・ポーロの東方

12 旅と書

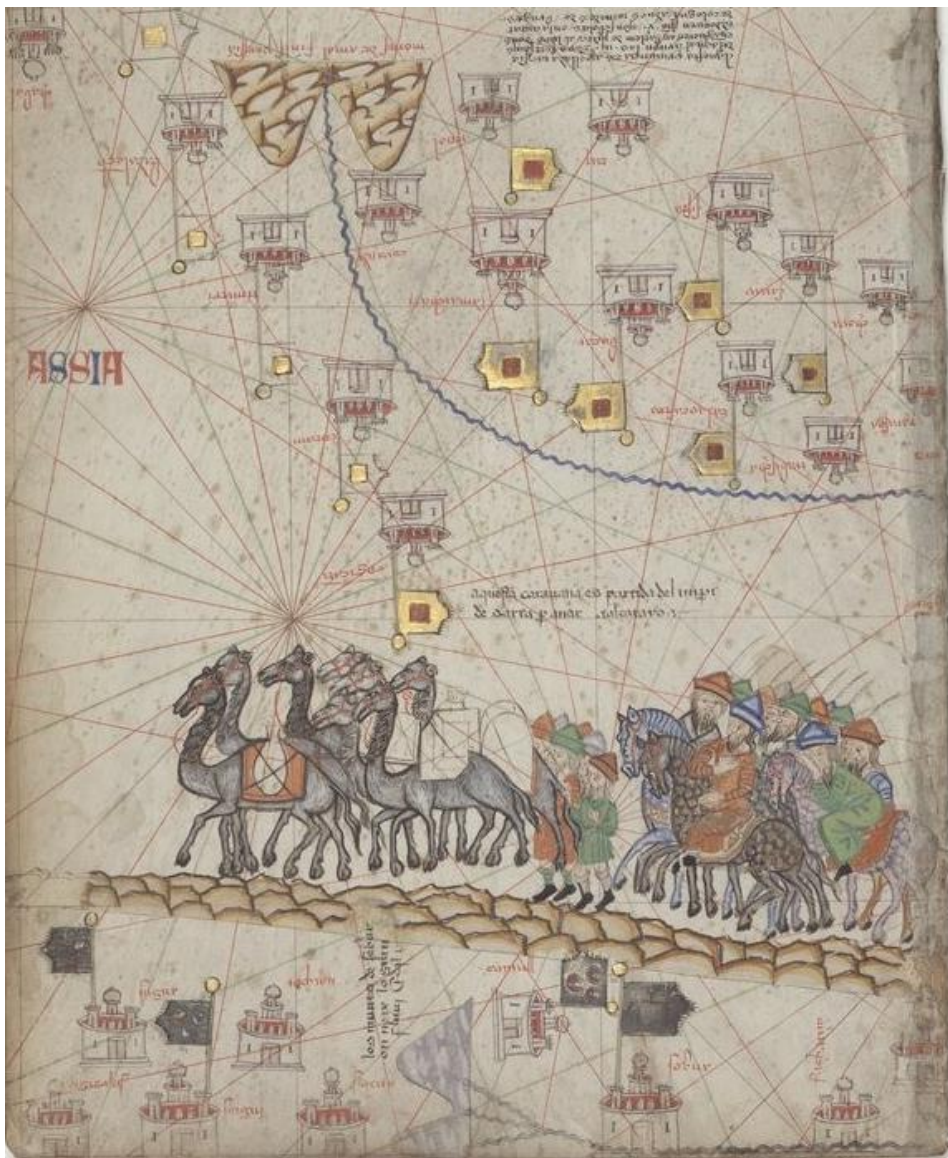


図1 東に向かうポーロ一行（カタラン・アトラス、パネルVI、部分）

0 はじめに

1241年4月9日、東方から襲来したバトゥのモンゴル軍は、ポーランド・レグニツァでシレジア公ヘンリク2世のヨーロッパ軍を敗り、公は戦死した。世界史が誕生した瞬間である。東洋と西洋が初めて直接交り、共通の歴史が始まったからである。古代のローマとペルシャと漢、中世のビザンティンとアラブと唐、いずれも国や地域を超えた大なるものであったが、直接交わることはなかった。がこの時は、西からのヨーロッパの進出と東からのモンゴルの展開があった。¹⁾

1096年、折しも始まった十字軍運動によって地中海を渡ってシリアと聖地を占領し、その彼方に広大で豊かな世界の広がっていることを知ったヨーロッパは、交易を求めて東方へ進出してゆく。その時最も有利な立場にあったのは、その中間に位置するイタリア、とりわけアドリア海の港町ヴェネツィアであった。1202年第4回十字軍とともに老大国ビザンティンを倒し、コンスタンティノープルを征服してラテン帝国を建てたこの海洋都市国家は、やがて東地中海の覇権を握り、新たな通商圏を求めて黒海に進出し、南ロシアに触手を伸ばす。そこへ、東から疾駆してきたのがモンゴルであった。

1206年、チンギス・カンの下に統一なったモンゴルは、その馬蹄を西へと進め、ウイグル・カラキタイ・ホラズム・キプチャク・ルーシと征服、1241年にはヨーロッパの東境ポーランド・ハンガリーを劫掠、次いでオーストリアに侵入、南はアドリア海岸ダルマチアに姿を現し、イタリア渡来も必至かと思われた。イギリスの年代記者マシュー・パリスは、地獄の悪魔の民タルタルスがアレクサンデルの閉じ込めた岩を破って躍り出て来たと警告し、教皇グレゴリウス9世はモンゴル十字軍の派遣を説き、神聖ローマ帝国フェデリーコ2世は全ヨーロッパが一致団結して共通の敵に当るべきことを呼び掛けた。と翌42年、オゴタイ・カアンの死が伝えられて、タルタル人は鉄門の彼方の故郷へと引き返して行った。

その出現に受けたヨーロッパの衝撃は大きかった。まず、彼らのことは何も知られず、聖書のどこにも書かれていなかったからである。神は全能であり、聖書には全てが記されているはずである。とすれば、聖書は間違っており神は完全ではないのか。そこで知恵者の修道士マシュー・パリスは、上述のごとき「タルタル人」の名をその中に見つけ、モンゴルと呼ばれる未知の民とは彼らのことに違いないと結論した。こうして、神と聖書は救われた。つぎに、彼らは強大無比であった。東の果てから発って以来、敵するところなく、辺境東欧も簡単に破られ、今まさに海を渡ってローマに迫らんとしている。とすれば、彼らは自分たちより強いのか。が幸いなことに、なぜか彼らは踵をめぐらせて東に戻って行った。こうして、国土と自然は救われた。そして次に、どこかわからぬが東の方には昔か

ら豊かな大国があるとも言われるし、最近は無限の富と領土を有するという司祭王ヨーハネスの噂も伝えられる。とすれば、彼らは自分たちより豊かで優れているのか、その文明は自分たちのところより偉大なのか。

こうして、彼らのことも東方についても何も知らないことを知ったヨーロッパは、これらに対する答えを求めて、布教を名目に情報収集と偵察に修道士を派遣することを考え、1245年教皇インノケンティウス4世はカルピニをカラコルムのクユクの下に、1253年フランス・ルイ9世はルブルクをモンケの宮廷に遣った。

ちょうどその頃、ヴェネツィアの商人貴族ポーロ家に一人の男児が生まれる。東方では、クビライが西南征伐に、フラグがペルシャ遠征に発った頃のことである。その子マルコは長じて父と叔父に連れられてユーラシア大陸を横断し、東の果てにまで至り、東方にあること十数年、帰路は南の海とインドを回ってヴェネツィアに帰り着いた。その間に、クビライは南宋を倒してカタイとマンジを征服し、フラグはアッバス朝を倒してイル・カン国を建て、カイドゥは中央アジアトルキスタンを支配下に収めていた。そこを旅したマルコは、こうして開かれた世界の最初の証人となり、ジェノヴァで編んだその書「世界の記」はかく始まった世界史の最初の書、ルスティケッロはその最初の語り部となった。今も謎に包まれているその旅と書の経緯を、大胆に推測して今一度ごく簡単にまとめると次のようにならうか（繰返しを避けるため、論証・例証・反証は極力省く）。

1 旅

1271年、父と叔父に連れられて東方に発つまでマルコがどのように過ごしたか、何も知られないが、いくつか後に深く関わる出来事があった。その世紀の前半、ヴェネツィアの支配下にあった東地中海の覇権は、同じく東方交易を狙うもう一つの海洋都市国家ジェノヴァの挑戦を受けていた。1261年、その支援を受けてギリシャ・コムネノス朝はコンスタンティノープルを取り戻し、ヴェネツィアを追放する。その町に店を構えていた父と叔父がそこを逃れて黒海の拠点ソルダイア（スダク）に渡り、そこからさらに東方に向かったのはその折のことであった。帰って来たのは1269年、そこには15歳になったマルコがおり、2年後にその息子を連れて再び東方に向かう、という運びになる。

その前年1270年には、ルイ9世の第8回十字軍があった。王は、同年8月チュニジアで疫病に倒れたが、その十字軍にイギリスの皇太子エドワードが参加しており、後にマルコの書を編むことになるルスティケッロは、その折に彼から借りた本を基に『メリアドゥス』を書いた、と言う。1271年頃とされることからし

て、彼はおそらくマルコよりも少し前の世代に属する。ちなみにダンテは、1265年生、1321年没であった。

東方行

その旅はどのように行われたか。基本的大枠においては、記されてあるとおりであったと考えて差し支えないであろう。その間の出来事および歴史状況とよく合致し、矛盾するところはないからである。この旅を全て創作することは不可能だったろうし、創作するにしてもこのような筋書きにする必要はなかったはずである。

まず、ニコロとマフェオの最初の東方行が、1261年から69年にかけてであった。上述1260年頃コンスタンティノーポリからソルダイアに移ってきた二人は、よりよい稼ぎを求めて東へ東へと向かい、ついにグラン・カンのいます開平府にまで来たる。途中ブカーラのバラクの宮廷で、イル・カン国のフラグから派遣されてクビライの下に向かうバヤン伯顔の知遇を得て同行する。これは後の中国でのポーロの活動に大きな意味を持った。で、大君は二人を教皇と国王たちへの使者に仕立て、キリスト教の学者百人の派遣とエルサレムの墓の上に燃えるランプの油の持参の使命を託した、と言う。旅はそのとおりであったとしても、そのうち使者と使命の件は、ポーロの方からの提案か振付であろう。あるいは、自分たちの立場を有利にしたいクビライの宮廷のネストリウス派キリスト教徒の入れ知恵があったかもしれない。13世紀のその頃は、自称・他称の使者たちが東へ西へと行き交った時代であった。その辺の事情に通じていたルスティケッロの思惑も加わっていたに違いない。とまれ、かくして1269年アークレに戻ったが、教皇座は空位で、仕方なくヴェネツィアに帰ると、15歳になる息子マルコがいた。したがって、その誕生は1254年と計算される。

待つこと2年、なお新教皇の選ばれないのを見て二人は1271年、マルコを伴って東方に向けて出発する。アークレでは教皇特使テバルドに頼んでランプの油を手に入れ、小アルメニアのライアスに付いたところ、折よく特使が新教皇に選出されてグレゴリウス10世を名乗り、再び戻って彼からクビライ宛の書状と特許状（と贈り物）を託される。これまたポーロの側からの申し出と、彼らを使者に仕立てたいルスティケッロによる設定であろう。こうして3年半の旅の後1275年夏、上都にあったグラン・カンの下に来たる。途中、バダクシャンで病のために1年、甘州では所用のために1年逗留した。病気療養はともかく所用で1年は長い、何らかの事情で足止めを食っていたのであろう。ポーロを、まるで独り荒野に行く旅鳥のように仕立てるのもルスティケッロの計らいで、砂漠地帯の単独行はありえず、隊商一行の事情もあったに違いない。掛かったその長さと、到

着後それへの言及が一切ないことから、上の彼らの使命というのが虚構であったことが分かる。

中国

こうして来た中国で、ポーロはどう過ごしたか。マルコを見たグラン・カンは、その秀でた才を知って寵愛し、家臣に取り立て、使者として諸方に派遣した、そしてその報告が本書となった、と。そのままは信じ難く、寵愛とか家臣に取立てたとかは、これもルスティケッロの脚色であろう。が、一半の真実はあろう。そうした機会と支援なしに個人として商売だけでは、17年の長きにわたって滞在し、各地に赴いて見聞することができたか危ぶまれるからである。それに、一介の異国人旅人、単なる商人では外からはとても窺い知れぬようなことが書かれてある。ではそれは、どのようにして可能となったか。

クビライは、ポーロに利用価値を見出したに違いない。彼らはラテン人でありキリスト教徒であり商人であった。つまり、西方の事情と宗教と商業に通じていることを意味した。ヨーロッパ諸国の事情を知りたい大君は、それに通じた人材を必要としていた。西域の人は多かったが、彼の宮廷と政府に他にラテン人がいたかどうか、きっといたであろうがなぜか諸史書には見当たらない。またこの書にもヨーロッパ人は他に一人として登場しない。これもルスティケッロの計算であろう。グラン・カンに寵愛されるラテン人は彼一人でなければ、使者マルコの物語は成り立たないからである。キリスト教徒であることも、クビライには好都合であった。彼らがイスラム及び仏教社会と宗教的・政治的繋がりを持たず、その関係と力の外にあることを意味したからである。

そして何よりの価値は、言葉にあったに違いない。西方のリングァフランカ（国際共通語）であるフランス語、母語であるイタリア語、それにおそらくラテン語の他に、東方交易商人の共通語であるペルシャ語、加えてモンゴル語とウイグル語も片言程度ならできたであろう。が、会話は通じて、読み書きもできたかは覚束ない。中国語とりわけ漢字は無理だった。したがって官吏には向いていなかった。が、単なる通事にはもったいなかった。となると、その利用価値が最も高いのは、役所の任務よりも情報関連の部門であったろう。実際この書においても、行政には通じていず軍事と宗教に詳しい。商業活動も行ったであろうが、これはルスティケッロが封印した。

かくしてポーロたちは、各地に赴いた。また各所に出入りすることができた。それは、時に通事、連絡役として、時に調停役としてであり、時には諜報活動も行った。その間には商売にも手を染めたことであろう。あるいは、そうした任務に就いたのはマルコだけで、ニコロたちは大都にあって商業に携わっていたかも

しれない。また普段は大君の移動に付き従い、側近くお供をすることもあった。出猟図さながらの狩がその一例である。上都や大都の宮廷奥深く入ることができたのもそのためであろう。また、政府部内に多くの知己を得た。彼らを通じて、異邦人には知り得ぬ多くの情報を手に入れることができた。

中国では、内陸部と沿海部の二つの旅のうち、後者ザイトン泉州までのルートは、実際に通ったに違いない。帰国時の出帆の地でもあり、道中の記事としては確かに最も説得力がある。一方、前者カラジャンあるいは西南諸地への任務というのは詳らかでないが、やはり通事かインテリジェンスサービスの仕事であったろう。しかし西南地方は、険しい山岳地帯であることからして、軍に随行してでなければ単独や隊商では難しく、行ったとしても成都かその周辺あたりまでであろう。それ以降は、確かに筆者の体験あるいは目撃と思える記事は乏しく、にもかかわらずその先の遠くの国々のことまで記されているからである。内陸部のルートは、その前から行われていた西南遠征にほぼそっており、それによって持ち帰られた情報に拠ったと推測される。

もう一つの派遣先インドは疑問である。インドの記事は、すでに東方にも西方にも伝えられていたことが大部分であって、中国の部でのような細やかで個性的な観察は見られない。帰路の折には立ち寄ったであろうが、派遣されたとすれば小インドすなわちインドシナ半島部、チャンパ辺りであろう。もう一つの問題の任務、3年間の揚州統治は、上述のことからしてあり難しく、何かの間違い、おそらく鎮江を統治したマルサルキスとの混同が疑われる。一方、襄陽や福州での活躍は、マルコの話に想を得たルスティケッロの創作であることは明らかであろう

同書に記されている中国滞在中の出来事で、年次が特定あるいは確実に推定できるものを年表風に挙げると次のようになるだろうか（カッコ内は同書での年次）：

1267-73：襄陽の戦い（Ch.146）

1275：ポーロ、シャンドウ上都着（Ch.15）

1275-82（1266-68）：クビライとカイドウの戦い（Ch.199）

1275：チャンジュ常州征伐（Ch.150）

1276-79（F1268, R1269）：マンジ征服（Ch.139）

1277-87（1272）：ミエン戦争（Ch.121-123）

1278-81：マルサルキス、チンギャンフ鎮江府統治（Ch.149）

1278（R1268）：チャンバ占城遠征（Ch.162）

1272-78：マンガラ（クビライの第3子）安西王（ケンジャンフ西安）（Ch.111）

1253-79：西南遠征～南宋征服（Ch.114-130、139-152）

（1280）：カイドウ皇女アイジャルックとプマール皇子の力比べ（Ch.201）

- 1280: エセンテムル(クビライの第5子フゲチの子)雲南王(ヤチ昆明)(Ch.118)
1281 (F1269, R1264): ジパング遠征 (Ch.159-160)
1282: アフマド事件 (R, Ch.85-1)
1284: クビライ、セイロン島にアダム(仏陀)の遺物のために使者を派遣(Ch.178)
1285: クビライの長子チンキム没、後継その子テムル (Ch.83)
(F1285, R1280): マルコ、チャンバ国滞在 (Ch.162)
1287 (1286): クビライとナヤンの戦い (Ch.77-80)
1287-90: イル・カン国3使節来朝 (Ch.18-19)
(1289/90): マルコ、インドより帰還 (Ch.18)
1290末/91初: ポーロ、帰国の途に就く (Ch.19)

これらから中国でのポーロの行動を再現するのは難しいが、意外と少なく、その中では西南遠征からナヤンとの戦いまで、戦関係のことが網羅されているのが注目される。このことから、その筋から多くの情報を得たであろうこと、その関係の部門の任にあったのではないかとの推定が支援される。

一方、その間に家族に変化があった。父ニコロがマリアという名の女性を伴侶に持ち、ステーファノとジョヴァンニーノの二人の息子を得たのである。すなわち、マルコは二人の弟ができた。それがいつだったか、マリアがなに人だったかは分からないが、東方人の可能性も高い。三人が共に行動することも多かったであろうし、滞在の晩年にはこの新たな家族の協力も当然あったろう。そのことは、活動のみならず情報の収集においても大いに役立ったに違いない。とりわけ、旅の先輩である父ニコロと叔父マフェオに負うところが多かったであろうことは推測に難くない。にもかかわらず、全編にわたってマルコの名前しか出てこないのは、これもルスティケッロの作為か二人の共謀である。

帰国

こうして滞在すること17年、望郷の念やみ難くというのは本当であろう、1290年末か91年初一家は泉州から出帆する。ペルシャ使節一行とともにコカチン姫を送ってというのは、その通りであろう。中国の正史にもペルシャの史書にもポーロの名が出てこないのは、この機会に便乗して帰国する通事かかつて情報部員であった下っ端役人であって、正式の使者の身分や地位にはなかったからである。つまり、家臣とか使者は、ここでも自称あるいは振り付けであった。『元史』にはコカチン姫の名すらない。

かくして、3か月航海してスマトラ島に着き、逆天候のため5か月そこに逗留し、さらに18か月航海して、1293年春か夏頃ホルムズに到着する。その間どこ

に寄ったかは分からないが、14隻 2000人の大部隊であったとすれば、インドの何箇所かには寄港したはずである。ペルシャでは、ガイハツの命令でコカチン姫をホラーサーンのアルゴンの下にまで送り届けたと言う。これまた、「使者ポーロ」の最後の任務である。通事か世話役としてならあったとしてもおかしくはないが、実際にそこまで行ったかは疑問である。そして、ガイハツの宮廷に9か月滞在し、黒海回りトレビズンダ、コンスタンティノーブル、ネグロポンテを経てヴェネツィアに帰り着く。時に1295年のことであった。その帰還を告げる記録はどこにもない。

情報源

旅は以上のものであったとして、1271年に故郷を立ったとすれば25年、その間マルコは、後にかの書の使われることになる情報や材料をどのように手に入れ、集めたか。

時期の順に並べると、まず、(一) ヴェネツィア出発以前のもの、があった。地中海最大の交易都市ヴェネツィアには、東方については豊富なその集積があった。古くからの商人であったポーロ家独自のものもあったに違いない。次に、(二) ニコロとマフェオの最初の東方行の時のメモ・ノート、が今度も携えられた。そして、(三) 二回目の旅の往路・中国・帰路のそれぞれの区間のもの、があった。長きにわたるにつれ自分たちの旅の稀有な価値に気付いたポーロたちは、中国には豊富にあった紙を利用して克明な記録を認め、他からも多くの資料を集めたに違いない。その中には、あるいは関係当局への報告の下書きもあったやも知れぬ。それに、(四) 帰路の船中とガイハツの宮廷にあったという9か月、どこで何をしていたか詳らかでないが、その間にもペルシャのみならず、中央・西・北のアジアの国々の最新情報を積極的に入手したことであろう。さらに、1295年以後に属するが、(五) 帰国後ヴェネツィアやジェノヴァでポーロとルスティケッロに伝わった情報、があった。これが、最後の部の記事となった。

それらを形態によって分けると、まず、(1) 書物や伝説の形で西方ヨーロッパにすでに伝わっていた新旧の情報、があった。ノアの方舟・東方三王からアレクサンデル伝説、プレストル・イオハン等がそれである。次いで、(2) ポーロ自身の体験と観察、がある。17歳で旅に出た若きマルコよりも、練達の商人であり旅の先達であった父ニコロと、とりわけその長大克明な遺言書から高い知性と温かい人柄が偲ばれる叔父マフェオのメモ・ノートのほうが多かったに違いない。そして、(3) 他者からの伝聞あるいは書き物の形での情報、があった。その量は膨大なものになるだろうが、情報源として直接かつ主なものだけでも以下が挙げられよう。

往路の道中では、①隊商仲間と、②現地のキリスト教徒。中国では、③クビライ政府の高官、その中には大君自身とバヤンが、同書に拠る限り含まれる。④主に色目人の役人と同僚、唯一名の挙げられるウイグル人ズルフィカルはその一人である。⑤クビライ直属の侍衛、とりわけアラン人キリスト教徒、軍事に関わることや遠隔の地のことはその多くが彼らからであろう。マルコもそれに属するか近くにあり、同門の彼らとはおそらくペルシャ語で意思の疎通を図れたであろう。同じく、⑥各地のネストリウス派キリスト教徒、チンギャンフ（鎮江）のマルサルキスはその最も有力な一人だったに相違ない。フジュ（福州）の隠れキリシタン（マニ教徒）のことは彼からであろう。⑦各地の西域とりわけペルシャ系商人たちのコミュニティー、キンサイのファクフル王の故宮を案内してくれた豪商はきっとそうした一人だった。彼らは、上のキリスト教徒とともにおそらく最も有力な情報源であったに違いない。揚州や泉州には、⑧ラテン人（イタリア人）のコミュニティーもあった。記録はないが、きっと大都にもあったことであろう。さらに、⑨人々の噂や言い伝え、がある。ジパングのこともそうした側面が見られる。意外に大きな部分を占めていたかもしれぬ。そして最後に、⑩書き物や図版、があった。南宋の女王がバヤンに送ったとされている書物は、それらを代表している。キンサイやマアバルはそうしたものなしには不可能だった。また、『諸蕃志』の記事との一致がそれらを傍証する。が、確実な種本の発掘はまだ一つもない。帰路では⑪ペルシャの使節たち、その一人ウラタイはアルグンをアコマットから解放した一人であった。⑫船の乗組員たち、そして⑬ペルシャ本土の上に準ずるキリスト教徒や商人たち、⑭ガイハツの宮廷、があったはずである。

それらから得た情報と知識は、ポーロの覚え書にはどのように認められてあったか。(a)事物や出来事の単語を並べた簡単なメモ程度だったか、(b)説明や私見を加えたノートのようなものだったか、それとも(c)解説や描写を施したそのまま草稿となるようなものであったか。といっても、一つに限る必要はなく、多少ともいずれも混在していたと想像した方が自然であろう。大部分はメモ程度であったろうが、モノとコトにより、時と所により、ノートや書き物もあったに違いない。ジェノヴァでは、それらをルスティケッロに提示すると同時に口頭でも説明した。そのときには、さらなる詳細を加えたことであろう。また、(d)スケッチや地図はあったか、伝聞したことはそのまま記録されていたか、(e)文書からの転記や翻訳はあったか、が問われる。さらには、もし本当に使者として派遣されたのなら、その(f)報告は高度なレベルのものでなければならなかったはずである。そうしたものの存在を想定しなければ、説明の付かないほど詳しい記事のあることも事実である。

ただ、記されてあることが、(2)のポーロ自身の体験と観察つまり見たことか、

それとも（3）の他者からの伝聞・情報つまり聞いたこと・読んだことか区別するのは、ルスティケッロの編集方針とその語りの口調とあいまって、容易ではなく、後者の情報源が上の①以下のどこからであったか突き止めることはさらに難しい。このように本書の記事は、多くの場合書になる以前の段階ですでに大きく分けて、その（Ⅰ）情報提供者と、（Ⅱ）ポーロ、という二つの手とフィルターを通していた。

2 書

編纂

そして1298年、マルコはジェノヴァの牢屋にあった。3年前故郷に帰り来た時41歳、そのまま引退はありえない。世界を目にし足に掛けてきた若者にとって、アドリア海の真珠のような町は華麗とはいえ余りにも小さかった。そこで、より大きな稼ぎと新たな見聞とさらなる未知の世界を求めて再び東方に向かわずにはおれなかった。あるいは、その稀有な体験のことを聞き知った市の商人たちに乞われて、リーダー兼ガイドとして船に乗り込んだのかもしれない。ルートはもはや熟知しているし、情報のためには前回の旅のメモ・ノートを持ち込んだ。ガイハツからもらった金のパイザも、きっと携えたことであろう。が、地中海は今回は安全ではなかった。東方交易をめぐるヴェネツィアとジェノヴァの争いはさらに激しさを増し、その全域で衝突を繰り返していた。そうした一つに巻き込まれたのであろう、捕えられてジェノヴァに連行される。1296年頃と見られる。最も大規模だった1298年のクルツォラの海戦（9月8日）では、書の編纂まで余りにも短い。

そこにルスティケッロがいた。1274年のピーサ沖メローリアの海戦で捕虜になったとすれば、すでに10年以上になる。かくして二人の出会いがあった。本当に獄中だったかそれとも市内のどこかかは分明でない。ともあれ、ピーサの作家はヴェネツィアの商人の話を読み、携えていたメモ・ノートを見た、読んだ。そして驚嘆し、世に出すことを考えた。彼が作家であることを知ったマルコの方から持ち掛けた、とする見方もある。が、より積極的に動いたのは、その旅とノートの価値を見て取った作家の方であったろう。ピーサとヴェネツィアの捕虜が出会って本を編むといったことは通常はありえないことからして、何らかのきっかけ、例えばジェノヴァ市当局あるいは商人団の仲介のようなものがあったかも知れぬが、うかがい知れない。

編纂はどのように始まったか。出会いがあったのは1296年頃、98年では本の完成まで時間がない。また、最初の出会いは牢屋であったとしても、早い時期に

どこかの建物に移ったことであろう。牢屋というのは、囚われの身という出会いのドラマ化である。そもそも、ルスティケッロは捕虜ではなく自由の身であったが本に権威と信用を付けるために同囚を装った、との説さえあるほどである。それはともかく、その時マルコの持ち来たったメモ・ノート・資料だけでなく、当然ながら、⑭口頭での説明、もなされた。それなしには不可能だったであろう。それら以外に、⑮ルスティケッロ自身の知識と、⑯ジェノヴァにあった情報と資料、が新たに加わった。騎士物語作家であったこのピーサ人は、十字軍運動との関係から東方事情にはけっこう通じていたフシがあるし、同市がヴェネツィアと並ぶ東方交易都市であったことは言うまでもない。それに、編纂作業が閉じられた獄の密室ではなく外の開かれた建物内で行われたであろうことは、さらに、⑰外部からの人・物そして最新の情報、が彼らの手元に届いたことを意味する。最後のアジアの部の、リアルタイムで書かれている記事がそれである。

そのメモ・ノートを読みマルコの話聞いた時、ルスティケッロがまず思い浮かべたのは自分が書いた騎士物語であった。ポーロの体験は、ランスロヤトリスタンの冒険に決して劣るものではなく、否、世界を舞台にし事実であることにおいてそれに勝る。その稀有な価値を認識した作家は、彼らを使者に仕立て、その使者が世界を探索して回るという物語に構想する。アーサー王に当たるのはグラン・カン、ニコロとマフェオは教皇と大君を繋ぐ使節、若き近習マルコは諸方に派遣されるクビライの使者、各地の記事はその報告である。それは、この使者たちがたどった往路・帰路と中国内に止まらず、その周辺の国々、ジパングとチン海の島々、東南アジアとインド各地、アフリカからアラビア、そして北方の地にまで及び、名実ともに「世界記」となった。

その報告、すなわちポーロのメモ・ノートには、主に4種類の情報が記されていた。一つは(A)都市・距離・行程・気候・自然などの地理情報、もう一つは(B)君主・宗教・言語・歴史・風習などの社会情報、三つ目は(C)産業・産物・商人・商品・貨幣などの商情報で、以上は使者にとっても商人にとっても必須のものであった。そして最後は、(D)珍しい物・奇妙な事のいわゆる驚異、変わった風俗習慣、新たな発見、君主たちの争い事などの、特記すべき事項であった。長の旅の道中、ポーロたちもその価値を自覚して、留意して書き留めたことであろう。実際、多くの地でこの順に記事が並んでいる。しかし、それらの土地を知らずまた物語作家であったルスティケッロにとって、最初の三つはおよそ退屈なものであったに違いない。一方最後の特記事項、とりわけ驚くべき事どもは興味尽きせぬ題材であり、対話の中でも引き出され、作家はそれを大いに潤色・誇張・改変し、時に創作・捏造もして物語に作った。かくてその書は、世界の「驚異の書」ともなった。

もう一つ、この作家が最も筆を揮ったのは、戦であった。クビライのみならず東方の君主たちの戦争を全て、『メリアドゥス』さながらの騎士物語の手法で書いた。かくてその書はまた、一連の「戦物語」ともなった。こうして、(Ⅲ) ルスティケッコ、という三つ目の手とフィルターが掛かった。

そして1298年頃、一応の完成を見る。まず、ポーロの旅にそって本編を書き、次いでその経緯を述べた序章を加えたのであろう。翌99年5月25日、ヴェネツィアと和平が結ばれ、8月には捕虜の解放があった。マルコはすぐ祖国に戻ったことであろう。残されたピーサの作家は、この世界記を完結すべく取り組んでいた残るアジア諸地域の記述を続ける。情報源である相棒がいなくなったこともあり、地理には手をつけずもっぱら歴史、とりわけ君主たちの争いを戦記物語に作って記す。イル・カン国ペルシャやキプチャク・カン国とロシアは、昔から関係深かったこともあって他にも資料があったし、東地中海や黒海周辺の拠点を通じて最新の情報がジェノヴァにも入ってきた。それは、もう牢屋ではなくどこかの建物で執筆していたルスティケッコの下にも届いた。1295年以降から1299年頃までの記事は、こうして書き入れられた。同年7月末ピーサとも休戦協定が結ばれ、程なく捕虜も解放された。が、この作家のその後の消息は一切ない。

写本

こうして編まれた書は、「はじめに」(2)で見たごとく、すぐ広く世に受け入れられ、その面白さと価値ゆえ次々と書き写された。今に伝わる写本ではFが最も古く、内容的にすでに崩れているが、言語的にはかのピーサの作家の語彙と表現を最もよく保っている。そしてそれらから、FG(1307年)、TA(1309年頃)、VA(同)、P(1314・20年頃)が作られ、さらに孫・曾孫写本が次々と生まれた。その過程で、誤記・誤訳・誤解から要約・省略・欠落そして加筆から書き換えまで、様々な改変を被った。こうして、もう一つ四つ目の手とフィルター、(Ⅳ)後の訳者・編者・写字生、が掛かった。

その後、ラムージョのRの集成訳(1559年)とZの発見(1932年)があり、そこにはF他にはない大量の独自記事があった、となるとそれらは省略かそれとも加筆かが大きな問題となる、最初は加筆と考えられていたが、オリジナルから省略されたとするベネデットの説が有力となった、これらのことは繰り返し見た。しかし、その異なりはあまりにも多くまた大きく、とりわけFにない長大な独自記事は、その多くが形式的にも文体的・内容的にも異質なもので、別に書かれた徴候を示していた。そのことは、Zは全ての記事がオリジナルに遡るのではなく、別の機会に書かれた記事を加えて新たにラテン語で編まれた可能性を考えさせた。ではそれは、いつ何処で誰によってか。

省略か加筆か

最もあり得る形として、二つが考えられる。一つは、(1)やはりジェノヴァで、解放前に、ルスティケッロによって、書かれた。彼は、最初から羊皮紙に順を追って現 F にあるような形で書いて行ったわけではあるまい。マルコのメモ・ノート（これを原初のオリジナル O⁰とする）に基づいて、また口頭での説明を受けながら、都市ごと・地域ごと・事柄ごとに別々に紙に原稿を書いたのではないか。紙は、その頃 13 世紀後半にはイタリアでももう生産されるようになっていた。そしてそれを、世界記という大きな構想の下に、ポーロの行程に沿って、また行っていない土地のことも挿入しながら、語りの口上を入れて繋ぎ合わせて編んだ。それが、一つ目のオリジナル (O¹) となった。F (の祖本 F⁰) は、それから作られた。しかしそれで終わらなかった。それが作られた時、ポーロの原稿が全て使われたわけではなかった、採られずして残ったものも、書き直したもの・書き足したものも、別の資料に基づいて新たに書いたものもあった。それらを加えて、二番目のオリジナル (O²) が作られた。つまり、増補改訂版である。それを編んだのは別の誰かであったか可能性はあるが、ルスティケッロであった確率の方が高い。それから後にヴェネツィアでラテン語に訳されたものが、Z (の祖本 Z⁰) となった。したがって、F の省略でも Z の加筆でもなく、新版であり、作者はいずれにしてもマルコとルスティケッロの二人である。

もう一つは、(2) 1299 年の解放後に、ヴェネツィアで、他の誰かによって、書かれた。ルスティケッロに基づいた材料については、前に述べた。様々なものがあつたであろうが、主たるものはやはりマルコから提供されたそのメモ・ノートと他の文書であつたろう。それらはどのようにしてジェノヴァにあつたか。二つの説がある。一つは、①マルコが捕まったのは、帰国後まもなく再び東方に向かおうとした折のことで、その旅に役立てるべく携えていた前回のメモ・ノートをそのまま牢に持ち込む羽目となった。もう一つは、②その牢でピーサの作家と出会い、自らの体験を書き出すべくヴェネツィアから取り寄せた、というものである。①は当然であろうが、それだけでかの書が書けたかは疑われる。口頭での説明もあつたろうが、記憶には限度がある。②の場合、そうしたこと、敵対していた都市から取り寄せることは可能だったか。牢ではなくどこかの建物で、市公認の下に編集作業が行われていたなら、可能だったとしよう。しかしその場合でも、全ての資料を移すことは無理だった、ヴェネツィアに残ったものも多かったに違いない。

そうしたヴェネツィアに残っていたものに基づいて、1299 年のマルコの解放後、誰かによって記事が書かれ、それがジェノヴァで作られていたオリジナル (O¹)

に加えられ、それらを合わせてラテン語訳されたものが、**Z** (の祖本 **Z**⁰) となった。その記事を書いたのはやはりルスティケッロであったことも、可能性としてはあるが、彼がマルコの後を追ってヴェネツィアに来たのかは、確証されない。ルスティケッロか他の誰かか、**F** と **Z** の文体の差つまり別の言語への翻訳であることが、その判定を困難なものにしている。他の誰かとして一番考えられるのは、**Z** の最初の訳者であるが、それが誰であるかはわからない。もしその場合は、新たな記事が直接ラテン語で書かれたこともあり得る。この形だと、オリジナルへの加筆であり、作者はマルコとルスティケッロの二人に限定されなくなる。

では、(1) と (2) のどちらか。その形式、つまり長文でかつ唐突に挿入されていること、その文体、つまり物語的ではなく事実描写的であること、ただしこれは翻訳によるものかもしれない、その内容、つまりはるかに詳細・正確かつ精緻であること、の異質さからして、後者、つまりより豊富な材料の残っていたヴェネツィアで後に誰かによって新たに書き加えられた、に傾く。しかし全てと言えるかは分らず、あるいはその中間型・混合型として、(3) ルスティケッロによって作られた二つ目のオリジナル (**O**²) に、(2) が加えられた形も考えられる。その場合、個々の記事がそのどちらか見極めるのは難しい。しかしいずれの場合にせよ、**F** と **Z** の異なりは、それら新たな記事に限定されるわけではなく、すでに見てきたごとく、個々の語句・文から記事・章まで、全編に渡っており、ほとんど書き換えと言っていいほどのものであった。**R** についても、同様である。

3 おわりに

マルコ・ポーロは実在した、長く東方に旅したことも疑いない、その見聞が 1298 年頃ルスティケッロによって書かれたことも否定されない。が、かといって、マルコの見聞だけが書かれたわけではなかった、他の人や書から採られたものが数多く含まれていた。また、それを書いたのは、ルスティケッロだけではなかった、何人もの訳者・編者・写字生たちが関わった。すなわち、その書は独りマルコとルスティケッロだけのものではなかった。同書が、少なくとも四つの手を経ていることはすでに見た。4 種類の作者によって作られたと言ってもよい。もう一度整理すると、(I) 情報提供者、書き物を含む、(II) マルコ・ポーロ、父ニコロと叔父マフェオを含む、(III) ルスティケッロ・ダ・ピーサ、そして (IV) 編訳者と写字生たち、である。前者はそれぞれ後者に基礎となるものを提供すると同時に、後者は前者に様々に介入した。その度に多くのものが新たに加えられると同時に、多くのものが略され省かれ、また時に変えられた。

マルコのもとには、(I) 情報提供者から手に入れたあるいは書き物から取った

膨大な情報があった。彼は、それらを認めたノートに、(Ⅱ) 自分たちの目撃と体験の記録を加えて、ルスティケッロに提供したし、口頭でも説明した。これを受け取った(Ⅲ) ルスティケッロは、それから一般的な情報、興味深いもの・驚くべき事どもを選びあるいは聞き出し、また既存の話や自分の知識をも加えてそれを物語に編んだ。ポーロのノートと説明に情報源の明示があったかどうかは分からないが、こうして情報提供者たちは姿を消した。さらにまた、ルスティケッロがそこから構想したのは「物語世界記」であって、ポーロの旅行記ではなかった。こうしてマルコの姿もおぼろになった。

その書が成ったのち、(Ⅳ) の一人 Z の編訳者は、残っていたルスティケッロの原稿やポーロのメモ・ノートその他の資料から新たな記事をラテン語に訳し、それをすでにあった F に加えた。その時、ルスティケッロの語りの口調や冗長な表現を省き、その説話的な文体を描写的なものに変えて、全体的に書き換えた。こうして、ルスティケッロもまたその影を薄くした。別の一人グレゴワールは、彼の奇妙なフランス語を正統なものに書き換えた(FG) が、内容への介入はしなかった。その後の FG の製作者たちは、素晴らしい挿絵を数多く載せて王侯たちのために豪華な「驚異の書」を作った。トスカナではフィレンツェの新興市民のためにその方言に(TA)、ヴェネトではヴェネツィアの商人たちのためにその方言に(VA) 訳された。それらは、かなり縮められてはいたが、基本的には忠実な訳だった。ボローニャではドメニコ会の修道士ピピヌスが上司に命じられて聖職者たちのためにラテン語に訳した(P)。彼は、全体的に大きく要約・省略する一方、東方の宗教に対する批判と非難の文句を随所に挿入した。が、ラテン語だったこともあってその後最も広く流布し、最も多くの人に読まれた。そして 16 世紀ラムージョは、P を基としてそれまで知られなかった写本から多くの記事を加える一方、後半は大きく縮約した(R)。加えられた新たな記事の中には、Z¹ (ギジ家稿本) からの正確・詳細なもの、VB からの誇張・恣意的なものが混ざっていた。この編訳者はそれらを区別することはできなかったが、全編を自分の流麗なイタリア語で書き換えた。かくして、マルコもルスティケッロも Z の編訳者も、その姿はさらに見え難くなった。他の写字生や近代の編訳者については、言う必要はあるまい。こうして、その度に時に豊かに時に貧しくなりながらすっかり姿を変え、またいろいろな名で呼ばれたが、常に「マルコ・ポーロ」であった。

その書は、一つ時 1298 年に、一つ所ジェノヴァで、一人マルコの見聞が、一人の作家ルスティケッロによって、書かれた一つの本、なのではない。最初に完全な一冊あるいは原本が作られ、それが次々と忠実に転記・翻訳されたわけでもない。何百年にもわたる長い時間の中で、多くの人と多くの所で多くの形に作られてきたものである。かの時かの所で二人の出会いがあり、最初の本が作られた

ことは確かであろう。が、その前に多くの人々や書き物が情報と材料を提供することによってそれに取り入れられたごとく、その後の多くの人々がやはり情報と材料を提供しながら書き写し、多くの言語に書き換え、またいくつかのテキストを合わせて編むことによって作り上げてきたものであった。「マルコ・ポーロの書」とはその総体を言うのであって、最初に作られたという F、最も正確・詳細とされる Z、最も広く流布したという P、あるいはそれらを合わせた R だけを指すのではないし、それらの一つが正本なのではない。そして、その書に冠されるマルコ・ポーロという名は、実際に旅しその見聞を核としているという点で、それに関わった人々、すなわち (I) から (IV) の四つの作者たち全てを代表する象徴なのであった。²⁾

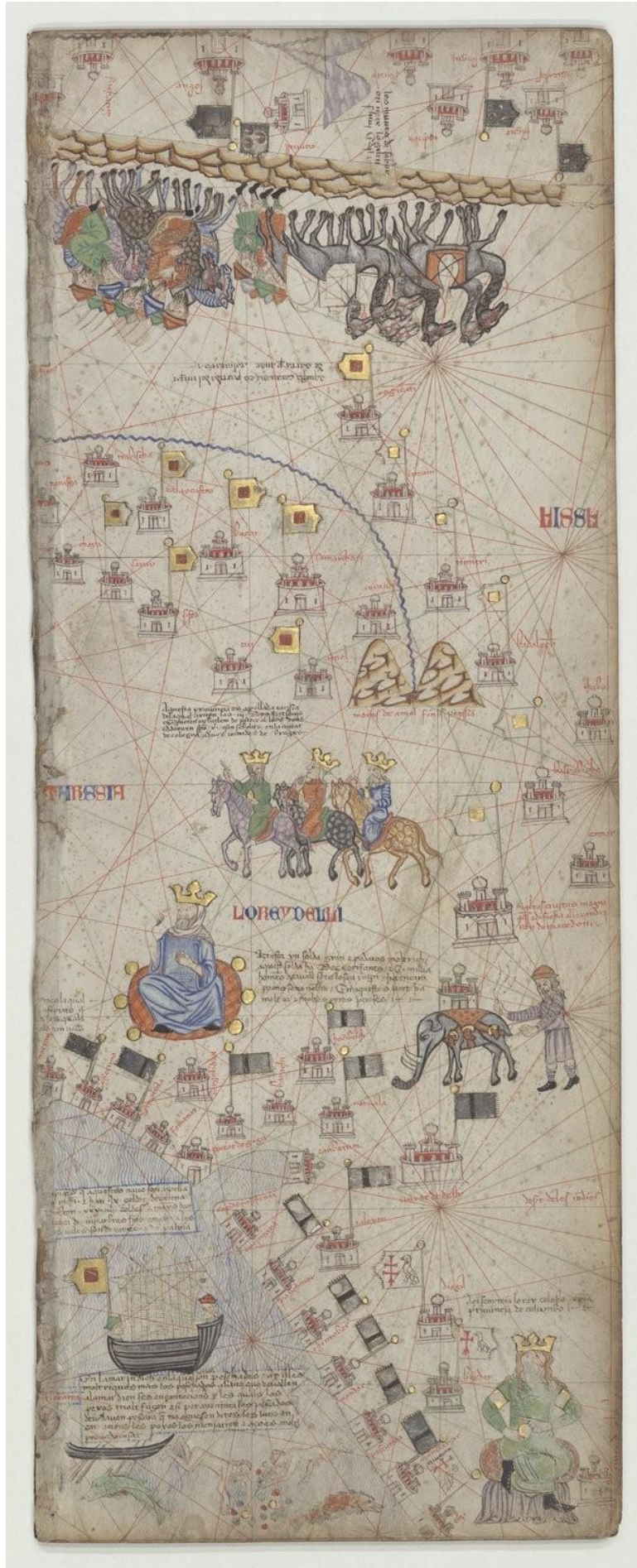
1*) 初出：高田英樹『マルコ・ポーロとルスティケッロ物語「世界の記」を読む』近代文藝社 2116。

1) この稿は主に、高田 6「ルスティケッロ・ダ・ピーサーマルコ・ポーロ旅行記の筆録者」；同 8「マルコ・ポーロ年次考—中世ヴェネツィア年代記」(2)、に基づく。

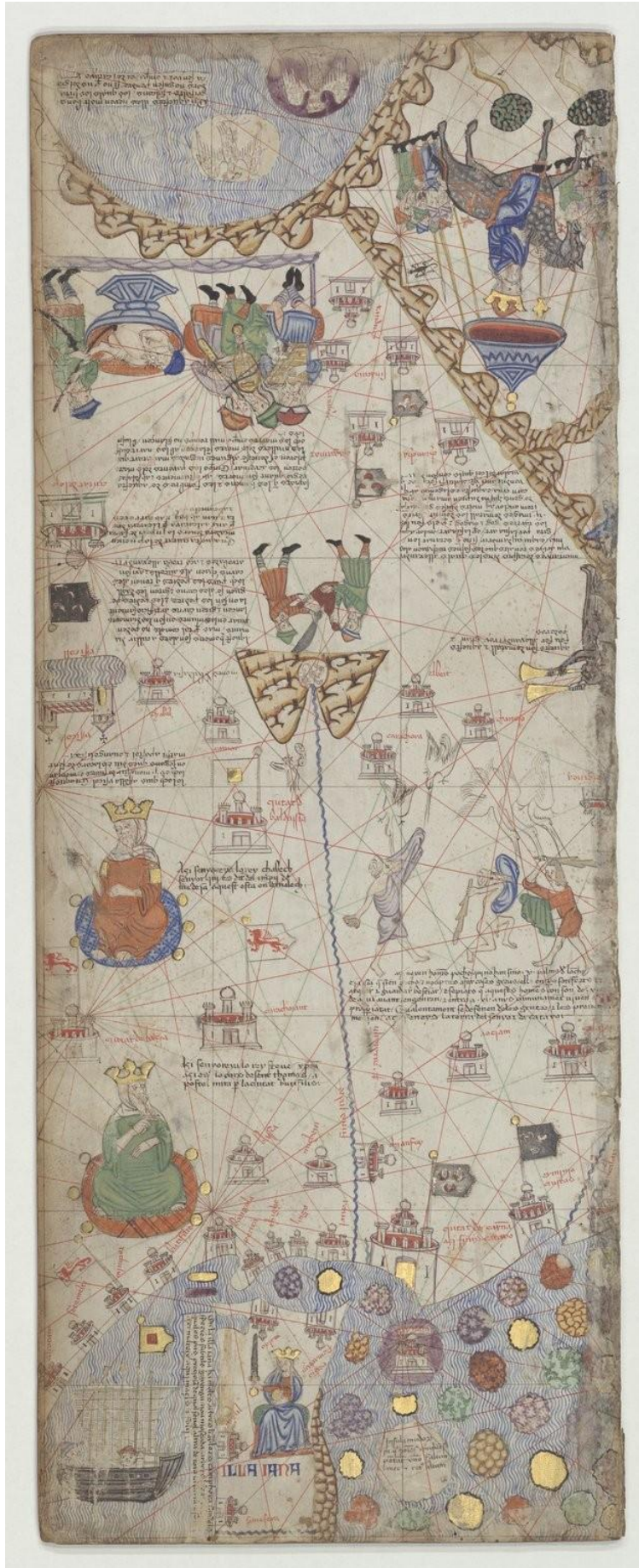
2) Cf. フランシス・ウッド(栗野真紀子訳)『マルコ・ポーロは本当に中国へ行ったか』草思社 1997；杉山正明「マルコ・ポーロはいなかった？」「マルコ・ポーロという名の誰か」『モンゴルが世界史を覆す』日本経済新聞社 2006, pp.130-50。こうした、その人・旅・書をめぐる懐疑や否定は当初からあり何ら目新しいものではないが、それなりの理由はあり、テキスト(とりわけ手稿本)の確定と明確な根拠、新たな事実と種本の発掘、に基づく今後の展開が期待される。

2*) 口絵および以下の図版ならびにマルコ・ポーロとの関連については、拙編訳『原典中世ヨーロッパ東方記』(名古屋大学出版会 2019) XV「カタラン・アトラス」のテキスト複写・転記・和訳・解説を参照されたい。

パネル VI



パネル VII



パネル VIII

